

仏様のおはなし新シリーズ第96集「聞くこと、いふこと」

浄土真宗のみ教えを聞くということは、人格向上のために聞くことではありません。ましてや、知識を充たすためだけに聞くことでもありません。その本意は自分を明らかにするためのものです。そのために聞かせていただきことなのだと、ということを、よくよく承知しなければならないと思います。

ご法事をさせていただいた時に「今日は良いお話を聞かせていただきました」と言われることがあります。

私自身「良いお話をさせていただく」ために法話をしたことは一度もありません。人の悲しみを誇うような話、人の心の表面上に響く話。そんな話ではなく、ともにお釈迦様や親鸞聖人のみ教えを聞かせていただき、限りあるいはのちを持つたともがらとしてお話をさせていただいています。

いわゆる良い話と捉えて法話を聞くかぎりは、人格向上のための話、煩惱がなくなるための話なのでありますよう。

聞法することは「なれぬ」私であつたということを知らせていく歩みです。「できるだけ我を出さないようにして、ちょうどしたこともなく、あまり欲深い生き方をせず、心豊かに生きていたい」と心密かに思っていますが、それはとても難しいことです。

老いぬれば 心のどかにありえんと思いたりけり あやまりなりき

歌人窪田空穂さんが九十歳の時の歌です。この方は真摯なキリスト教の方だったと聞かされています。おそらくキリストの教えを信仰しての生活ですから、老年になつても、心おだやかに日々を送ることができると思つておられたことでしょう。それが現実では全くそうではなく、こんなはずではなかつた、と我が身を省みられたところから生まれた歌なのでしょう。我が身をざまかさなかつたからこそその歌なので思います。

親鸞聖人も同じく露骨なまでに

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、
欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこうろ
おおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでどどま
らず、きえず、たえず

と、「一念多念文意」の中できらげだしておられます。無明煩惱が身に充满している。いや、煩惱の海にこの身が木の葉のように浮いている。我が身のあり様を知らされざるをえないのが聞法なのです。

親鸞聖人ほど自らを「救われざるわが身」と受けとめられた方はいないと思います。だからこそ、「たすけんとおぼしめしたちける本願」を、かたじけなくいただける身になられたのでしょうか。

